

日本文學名家導讀

中日文對照

菊池寬◎著 陳鵬仁◎譯

菊池寬

の文學世界

日本文學名家導讀

菊池寛

の文学世界

菊池寛◎著 陳鵬仁◎譯



國家圖書館出版品預行編目資料

日本文學名家導讀---菊池寬の文学世界／菊池寬著，陳鵬仁譯，

-- 初版.-- 臺北市：旺文社，2003〔民92〕

面；公分--(日語學習系列)

ISBN 957-508-692-9 (平裝)

861.57

92014698

日本文學名家導讀--菊池寬の文学世界

ISBN 957-508-692-9

作 者／菊池寬

譯 者／陳鵬仁

發行人／李錫敏

出版者／旺文社股份有限公司

地 址／台北市仁愛路四段27巷28弄1號B1

郵撥帳號／1131222-2

電 話／(02) 2778-9912 (代表線)

傳 真／(02) 8773-5125；2778-2480 (代表線)

E-Mail / warmth12@ms35.hinet.net

登記證／行政院新聞局版台業字第3835號

總編輯／鄭婉坤

編輯／吳芳滿 徐湘硯

美術編輯／廖秀貞 劉欣然

內文排版／浩翰電腦排版股份有限公司

印刷／崇豐印刷企業有限公司

初版一刷／2003年9月

法律顧問／尤英夫律師 楊明廣律師

總經銷／貞德圖書事業有限公司

地 址／台北縣新店市寶橋路235巷133號8F之2

電 話／(02) 8919-1022 傳 真／(02) 8919-1019

定 價／新台幣250元

Printed in Taiwan

《本書如有缺頁或破損，請寄回更換》

版權所有，翻印必究

目 録

C O N

第一篇	外套	06
第二篇	図書館の追憶	10
第三篇	天の配剤	20
第四篇	勝負事	30
第五篇	災後雜感	42
第六篇	身投げ救助業	58
第七篇	無名作家の日記	78
第八篇	恩讐の彼方に	142
附録一	菊池寛年表	212
附録二	陳鵬仁譯著專書	218

T E N T S

- 第一篇 大衣 08
- 第二篇 我對於圖書館的回憶 16
- 第三篇 巧合 26
- 第四篇 賭博 38
- 第五篇 地震 52
- 第六篇 投河自殺 70
- 第七篇 無名作家的日記 116
- 第八篇 超越恩仇 184
- 附錄一 菊池寬年表 216
- 附錄二 陳鵬仁譯著專書 218

日本文學名家導讀

菊池寛

の文学世界

菊池寛◎著 陳鵬仁◎譯



目 録

C O N

第一篇	外套	06
第二篇	図書館の追憶	10
第三篇	天の配剤	20
第四篇	勝負事	30
第五篇	災後雜感	42
第六篇	身投げ救助業	58
第七篇	無名作家の日記	78
第八篇	恩讐の彼方に	142
附録一	菊池寛年表	212
附録二	陳鵬仁譯著專書	218

T E N T S

- 第一篇 大衣 08
- 第二篇 我對於圖書館的回憶 16
- 第三篇 巧合 26
- 第四篇 賭博 38
- 第五篇 地震 52
- 第六篇 投河自殺 70
- 第七篇 無名作家的日記 116
- 第八篇 超越恩仇 184
- 附錄一 菊池寬年表 216
- 附錄二 陳鵬仁譯著專書 218

前言

菊池寬，一八八八年十二月二十六日出生於日本香川縣高松市，一九四八年三月六日病逝於東京，享年五十九歲。曾就讀於東京高等師範學校、明治大學、早稻田大學、第一高等學校，畢業於京都帝國大學英文科。

第一高等學校的同班同學，有日後成為著名作家的芥川龍之介、久米正雄、成瀬正一、松岡讓、山本有三等人，他曾用過菊池比呂志、草田杜太郎等筆名。

在生活態度上，菊池寬認為「人生第一，藝術第二」，因此他反對為藝術而藝術。故他日後創辦日本最著名的雜誌『文藝春秋』，改善文人的生活。

在日本文學史上，菊池寬被列為新現實主義和新理知主義的作家。換句話說，他提倡確立人性的尊嚴和個人主義，因此他的作品很容易懂，多為意圖清楚的「主題小說」。所以菊池寬說：「小說是作家如何處世的報告書，和應該怎樣處世的意見書」。

菊池寬之所以具有這樣務實的人生觀，應該與其出生貧窮家庭，苦讀，力拼踏進文壇的人生經驗具有不可分割的關係。他創辦日本最有權威的芥川獎和直木獎，就是為了要培育和提挈新進作家。在今日日本，獲得這兩個文學獎的任何一個獎，乃是踏上文壇的最有力護照。



菊池寬作品最大的特色是，勸善懲惡，即褒揚善人，懲罰壞人，揚善嫉惡，主持和伸長社會正義。我覺得今日台灣的社會日趨敗壞，故菊池寬的小說，相信對台灣社會風氣具有矯正的作用，而這也是為什麼我要翻譯菊池寬作品的主要原因。

譬如他於八十三年前所出版的《珍珠夫人》，今日在日本和美國重新獲得肯定和風行，就是其作品具有矯正社會風氣和宏揚道德勇氣的功用所致。

本書所選譯的作品當中，最能代表上述思想的就是「超越恩仇」這一篇。這是批判報仇行為之毫無意義和人本主義之勝利的作品；「無名作家的日記」是他走上文壇的代表作。一般日本文學辭典，介紹菊池寬時，一定都會提出這兩篇為菊池寬的最主要和最出色的作品。

其他作品，譬如「投河自殺」是描刻人對生和死的看法；「賭博」、「地震」是對人性和自然的刻劃，顯現菊池寬對人生很現實的認識；「巧合」和「我對圖書館的回憶」，都有菊池寬很實在而幽默的人生觀。

我希望此書問世能對社會發生一些淨化的作用，尤其希望年輕的朋友能學習菊池寬的人生觀和提昇日文的程度。最後我要感謝旺文社幫我出版這本極富意義的書。

陳鵬仁



外套

私が貧乏であったのは、学生時代である。

高等学校時代にも、金がないために、寄^き宿^{しゆく}舎^{しゃ}の便所に落ちていたドイツ語^ごの辞書^{じしょ}を拾い上げて、乾^{かわ}かしてから古本屋へ売ったりしたが、それは一高^{こう}式^{しき}の冗談^{じょうだん}半分であった。が京^{きやう}都^と大学へ行ってからは、学資^{がくし}が足りないので困った。其処には、もう冗談がなかった。

私が、五日ばかり一文なしで困っていた時だった。帝都大学内のテニスコートの中を通りかかると、五銭の白銅が落ちていた。雨に打たれたと見えて、少し赤くなっている。私は、一旦行きすぎてから、それが気になって引き返した。其処まで私は覚えている。何だか、それを拾い取って使ったような気がするのである。が、私の羞恥^{しゆうちしん}心が使ったほうの記憶^{つと}を努めて消し去ったと見えて、今では使ったか使わないか覚えていないといっても、疚^{やま}しくないほど記憶が薄れている。

むろん、私は学校を出てからも貧乏であった。結婚をするとき、帰国するのに三十円しか持っていなかった。木綿の

着物とお祝に送られた^{こうき}高貴の羽織が一枚あっただけである。
新婚の妻は、私の^み見身すばらしい姿を^{あわ}憐れんだと見え、帰京
の途次^{なごや}名古屋で^{きんぶち}金縁のめがねを買ってくれた。十一円八十銭
であった。

が、学生時代からこうした^{なさ}貧乏時代にかけて、一番情け
ないことは、^{ふゆがいとう}冬外套のないことだった。夏外套を着ないと
か、^{きぬもの}絹物を着ないとかは、趣味の問題だといえる。が、冬外
套を着ないのは、趣味でない。

電車の中を見廻して、自分一人丈外套を持っていないこ
とを知ると、耻しさと寒さとで、一層身がちぢまる。この頃、
僕の家へ来る^な貧乏を以て任ずる人を見ても、みんな外套丈は
持っているようだ。どうも、一般に外套も普及したと見え、
電車の中で外套を着て居ないような人は、この頃^{ちよつと}一寸見当
たらぬ。こうした^{にっちゅう}貧乏な学生時代、日中道歩いていて、巡
査に怪しまれて^{すいか}誰何されたり、^{こうぐし}香具師の^{まちが}大学生に間違われた
りした話もあるが、他日にゆずる。とにかく、^な貧乏というも
のは、記憶になってしまってもあまり愉快なものではない。

單字：

1. 羽織：^{はおり}①【名】(和服外面的)短外掛
2. 見すばらしい：^み⑤①【形】寒酸，破陋
3. 任ずる：^{にん}①③Ⅰ【他サ】任命。Ⅱ【自サ】①自命②承擔
③出任
4. 誰何：^{すいか}①【名・他サ】盤問，查問
5. 香具師：^{こうぐし}②【名】＝野師，江湖藝人

大衣

學生時代，我很窮。在高等學校（大學預科—譯者），因為沒有錢，曾經把掉在宿舍洗手間的德文辭典撿起來，曬乾後拿去賣給舊書店。不過這是一高（第一高等學校，大多會考上東京帝大—譯者）式的半開玩笑。但進了京都大學以後，由於學費不夠，而遭到困難，這時已經無從開玩笑了。

我差不多已有五天沒錢可用時，發生了這件事。走過帝都大學校園內網球場時，在地上發現了五分錢的白銅板。可能因為遭到風吹雨打，它有點紅紅地。我若無其事地走過去，因放不下心，後來我又走回來。我只記得到這裡。好像我把它撿起來，把它花掉了。可能因為羞恥心把我使用它的記憶力淡化了，故現在說不記得有沒有花掉它，也並不覺得於心有愧。

當然，學校畢業以後我還是貧窮。結婚時要回故鄉，我身上只有三十塊錢。我只有一件棉作的和服和我結婚時所收到的一件高貴短大衣而已。新婚的妻子，大概是可憐我這副寒酸的樣子，回京都途中，在名古屋買了一幅金邊的眼鏡送給我。花了十一塊八毛。

但從學生時代到這樣窮困的時代，我覺得最沒有面子的是

沒有冬天大衣。夏天不穿外套，或不穿絲綢，這或許可說是個人嗜好的問題。但冬天不穿外套（大衣）不能說是興趣的問題。在電車裡，看到周遭的人，只有自己一個人沒有大衣可穿時，因害羞和寒冷而更加覺得自己沒有出息。最近，自稱沒有錢的人來到我家也似乎都擁有大衣。穿大衣，大概極為普遍了，所以在電車裡，幾乎看不見沒有穿大衣的人。這樣貧窮的學生時代，白天走在街上，遭到警察盤問時，或被誤認為跑江湖的大學生，關於這些，改天再談。總之，貧窮的記憶，不是一件愉快的事。

図書館の追憶

—
私の中学時代に、もっともありがたい事は高松^{たかまつ}に図書館が出来たことである。これは実に嬉しいことである。多分明治三十九年の二月の開館^{かいかん}だったと思うから、私が三年生の二月である。私は四年生五年生と図書館に通う^{かよ}ことが出来たのである。この図書館の一ヶ月券^{いげつけん}の第一号は私が買ったのであるが、そのとき月五銭^{つき せん}だった。丁度中学と私の家との途中にあったのだから、私は一日として図書館に通わないことはなかった。蔵書^{ぞうしょ}は二万余冊だったが、その中で少しでも興味のあるものはみんな借りたといってもよかった。私は半生を学校へ通う^{かよ}よりはもっと熱心に図書館へ通った男であるが、その最初の習慣は郷里の図書館から始ったわけである。

私は、卒業後東京へ出て来ると、着^{ちやくきやう}京の翌日直ぐ上野図書館へ行った。そして、その無尽蔵^{むじんぞう}な蔵書を見て、大^{だい}歓喜^{かんき}の情を感じたものである。私は東京の何物にも感心しなかったが、図書館にだけは、十分驚きまた十分満足をし、これさえあればと思った。

二

私位図書館にかよった男はないだろう。私は青年時代思う通り本が買えなかったなのでその飽^あくなき読^{どくしよよく}書欲を図書館でみたした。私は、半分以上いな作家としての学問は八分まで、図書館でしたといってもいいだろう。私の図書館通いは郷里の高松で始まった。高松の教育会図書館は、たしか私が中学の三年の三学期の紀元節^{きげんせつ}に、開館したと思う。明治三十九年だったと思う。一月券が、わずかに五銭だった。その一月券の第一号は、私である。中学時代に図書館が出来たことは、私にとってどれほどありがたいことだか分からなかった。

私が明治四十一年に上京したとき、最初に行った所は上野の図書館である。勝手の分からない東京で図書館だけが勝手が分かるような気がしたのである。私は、そこで今まで名前だけ知^{かつ}って渴^{かつ}していた多くの本をむさぼり読んだ。

その後、私は境遇の変化につれて、大橋図書館へも通った。日比谷の図書館へも通^{かよ}った。恐らく、此三つの図書館の各々へ百回以上、二百回三百回は通っただろう。明治四十三年の事である。時事(註①)に学生欄というのがあったとき、私は其処へ「三大図書館比較評」という文章を投書^{とうしよ}して、この三大図書館の得失^{とくしつ}を論じた。当時日比谷の図書館の借出し口^{かりだ}には、金網^{かなあみ}が張られていたのが、とり除かれたのは私の投書の力であったと信じている。その頃の図書館の便所^{わいざつ}は猥雑な落書き^{らくが}で一杯だった。

その後、私は芝居の大入り場^{おお い ば}へ行くことを覚えたが、芝居^{せいじょう}の便所^じは清浄^{まつ らく が}として、一字一^{ぎょう}抹^ぎの落書き^{さ たん}もないのを見て、芝居の見物と読書生とが、これほど行儀^{ぎよう}が違^{ちが}うのかと嗟嘆^{さたん}したが、然しその後よく考えて見ると芝居の見物は誰も鉛筆を持っていないが、図書館へ行く者は皆鉛筆を持っていることを思って、一人で微笑したことなどもあった。

京都へ行ったときも、私が一番^{おかしき}に行^いったところは、岡崎^{おかざき}の図書館であった。あの閲覧席^{ついで}の真中に、しきりの衝立^{ついで}のある静かな閲覧室もなつかしく思い出される。岡崎の図書館へも私は二三百回通^{かよ}っただろう。大阪^{おおさか}や奈良^{なら}や岡山^{おかやま}などはゆ^とくり^{りゅう}逗留^{とうりゅう}したことはないのだが、それでも図書館だけへは顔出し^{かお}をしているのである。早稲田大学^{わ せ だ だ い が く}の図書館へも通^{かよ}ったことがある。私が多年渴望^{かつぼう}していた西鶴^{さいかく}の大鏡^{おおかがみ}を読み得たのは、あの図書館のお蔭である。

上野の図書館で、七銭の弁当や三銭のカツレツなどを幾度喰^{おほし}ったか分らない。大橋^{おほし}の図書館では、幾年も通いつけて居^はたらしい頭の禿^はげた四十五六の医学生^{い がく せい}の顔を知っている。私が一年振二年振に行^いっても、その人は必ず来^きていた。私が時事新報^{じ じ しん ぽ う}の記者^{うしごめ}をしていた時、牛込^{うしごめ}の区役所^{うしごめ}へ総選挙^{うしごめ}の模様^{つば や す い や}を見に行^いったとき、その人は坪谷水哉^{つば や す い や}氏の選挙事務所^{せんきょ じむしょ}の手伝い^{てんい}をしていた。

大橋^{おほし}図書館へ通^{かよ}っているうち、館員^{くわんいん}と親^{した}しくなり、従^{したが}って坪谷^{つば}氏の選挙^{せんきょ}の運動員^{うんどういん}に頼^{たの}まれたのであろうなどと考え